



第25回
全国読書作文コンクール
優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

平成二十七年第二十五回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

デクスターの出来事と私の経験

真 崎 菜 々 子 (小六)

人はつらかったことなど、人には言えないことがあると思う。デクスターもロビンも苦しんだり悩んだりしながら、少しずつ不安を乗り越えていった。デクスターが作文を「書く」ことで心がいやされたのと同じように、私もこの作文を「書く」ことで前に進むと思う。

私のひいおばあちゃんは、三年前に亡くなった。家族のみんなは、「小城のばあちゃん」と呼んでいた。小城のばあちゃんは、病気だった。病気で苦しいはずなのに、昔のことをたくさん教えてくれたり、時には、一緒に出かけてもくれた。遊びに行ったら必ず、大きな声で「いらっしやい」と言ってむかえてくれ、亡くなるまで笑顔のたえない明るい人だった。私が妹とけんかをすると、「けんかはだめ。泣いたらかわいい面がぐしゃぐしゃになるよ」と言ってくれた。今思えば、小城のばあちゃんは、笑顔が大好きだったので、泣き顔を見たくなかったのだと思う。

三年前のある日、小城のばあちゃんの家遊びに行った夜、私がうとうと寝そうな時にすぐそばに小城のばあちゃんがいた。「どうしたの」と

私が聞いたら、私の体に布団をかけ、さみしそうな顔でどこかに消えてしまったのを覚えている。夢なのか現実なのか分からないままだが、父にそのことを言うと、「父ちゃんも菜々子の近くに誰かいた気がしたなあ」と言ってくれた。その日の夜中、小城のばあちゃんは亡くなった。

私は、一つだけ悔いが残っていることがある。小城のばあちゃんを大好きな花火大会に連れて行ってあげられなかったことだ。だから、家族や親せきみんなで、花火大会を見ている絵を描いた。そして、おそう式の日、ひつぎの中の小城のばあちゃんの顔の横にそっと置いた。

デクスターは、ロビンをたいたあとに、「泣くのはやめろ！泣くんじやない！絶対人に泣き顔なんかみせるな！」とさげんだ。それが、小城のばあちゃんにそっくりだったから、この場面は強く印象に残った。

十二才の今、私は合唱団で歌を歌うことをがんばっている。私が歌を歌って聞いてくれる人みんなが元気になり、笑顔になれるように思っている。

私の小城のばあちゃんが教えてくれたこと、それは、泣き顔ではなく笑顔でいること。胸をはって、小城のばあちゃんに会えるように笑顔で前に進んでいこうと思う。

対象図書名

ぼく、悪い子になっちゃった！

大賞へ、審査員のひとこと

最初の方で、「デクスターが作文を「書く」ことで心が癒やされたのと同じように……」という書き出しで、自分をそこに重ねて、「私もこの作文を「書く」ことで前に進む」と思う」というふうには、自分もひいおばあちゃんのことを「書く」よりも、見直して超えようという事を自覚しているところが優れていると感じました。「書く」というのを、自分の中で位置づけていければ、この事に限らず、これから大きくなって大人になっていく中で、「書く」という事を思いついて、いろんなことを考えたり、「ひいおばあちゃん」について欲しく思います。

受賞者のひとこと

私は、今回初めてこの読書作文コンクールに出品させて頂きました。受賞の知らせを聞いたときは、とてもびっくりしましたが、本当に嬉しかったです。

この本を選んだきっかけは、主人公が私と同じ「転校」という体験をしてきたからです。でも、読み進めていくうちに、ひいおばあちゃんのことがい出され、今まで我慢していた気持ちがかみ上げてきました。作品を完成させるために、何度も書き直しをしました。「書き続けたい」という気持ちがこのような素晴らしい賞を導いてくれたのだと思います。主人公のように、私も作文を書いたことで、気持ちがあすっきりしました。

これからも、周りの人々への感謝の気持ちと、ひいおばあちゃんが大好き

きだった笑顔を忘れずに、頑張っていこうと思います。

小学生低学年の部・最優秀賞(小三)

太平のカメ日記を読んで

石貫 美華

太平のクラスメートに、実香がいます。実香はたよりになるし、クラスのみなから一目置かれています。そんな実香には、なおリンというお姉さんがいます。実香は、なおリンのことをあまり知られたくないと思っていました。なぜなら、なおリンはわがままで、ダウン症という障害があるからです。

ある日実香は、なおリンといっしょにいるところをぐうぜん太平に見られてしまいました。その何日後、実香はなおリンのことを太平に聞いてもらいました。実香は、とてもすっきりした気持ちになりました。私にも似たようなことがありました。二年前に予選落ちしたピアノのコンクールに、この夏もう一度チャレンジすることになりました。練習のときは、音符の長さや強弱やリズムに気をつけて、片手ずつひいたり、メトロノームにあわせてみたりして何度もひきました。

練習をみてくれていた母は、ずっと、

「まだまだだなあ。」

と言っていました。本番の前日にやっとノーミスでひけて、

「百点。明日もこの調子でがんばってね。」

と言ってくれました。私は、本番でピアノをひく自信ができました。

本番では、ノーミスで演奏することができました。自分でも上手にひけたと思っていました。結果が発表されるまでの間、ひよつとしたら予選通過するかもしれないと期待していました。ところが、今回も落選してしまいました。演奏がゆっくりすぎたのかもしれませんが。今回が点数のつかない発表会なら、大満足で気持ちよく帰ることができたのと思いました。

帰りの車の中で私は、ショックでひとこともしゃべれませんでした。

くやしくて、その気持ちをしばらくだれにも言えませんでした。

ある日私は、母にくやしい気持ちを打ち明けると、母は私をほげますために、喫茶店に連れて行ってくれました。そこはとても静かで、ちがう世界に来たようでした。喫茶店のクリームソーダを飲みながら、母は、「結果はどうであれ、コンクールに向けて練習してきたことは、むだにはならないよ。」

と言ってくれました。私は、コンクールに落選したことで、ずっともやもやしていました。しかし、母と話をして、なんだか気持ちがすっきりしました。自分の元気がないときに人と話をすると、心がうるおうんだ

なあと思いました。おかげで気持ちが前向きになり、ピアノの練習を再開することにしました。

太平のかっこいいカメのガッチンは、あきらめずに何度も挑戦しつづけていた五センチのかべを乗り越えることができました。私もガッチンを見習って、努力して、次のコンクールでは、賞を取れるようがんばりたいです。

対象図書名 太平のカメ日記

受賞者のひとこと

私が読書感想文を書いたのは、今回が二回目です。前回は、学校の夏休みの宿題として提出したのですが、読んだ本のあらすじばかりを書きました。

そしてこの春、塾に入り、このようなコンクールがあることを知りました。今回、読書感想文に取り組む前に先生から、

「自分の体験にもとづいて書いてみよう。」

と、アドバイスを受けたので、ピアノのコンクールのことについて書いてみました。まさかこのような大きな賞がもらえるとは思っていませんでした。本当にうれしいです。

今回の読書感想文を書いたことは、私にとってとてもよい経験になりました。私は伝記が好きで、今までは伝記ばかり読んでいましたが、こ

れからは、もっといろいろな種類の本を読もうと思います。

小学生の部・最優秀賞（小四）

大切な時間

水城 志

私には、百四才になるおばあちゃんがいます。正かくにいうと、お父さんのあばあちゃんなので、私のひいおばあちゃんという事になります。

しわくちやのイメージは全くなくて、せは高くせずじはピンとのびています。時々、きれいにお化しようをしたりして、とてもステキなおばあちゃんです。おもてなしが大好きで、よくコーヒーを入れてくれていました。毎回、何かがちがう味のコーヒーだったので、いつも一口しか飲めませんでした。思いきつてたずねてみると、「何かがちがう味」の正体は、ブランドーでした。私はお酒なんて飲めないのに、おばあちゃんは、

「いい香りでしょう。」

とにんまりと笑うのでした。いつも不思議な出来事の連続だったので、私の心の中は、ハラハラ、ドキドキがたえませんでした。

ただ一つだけ、がっかりすることがあります。それは、何回話をして

も、私のことを、
「あなたは、どなたでしょうか。」

と不思議そうに言うのです。おばあちゃんの頭の中は、どうなったのでしょうか。そういえば、以前からの忘れが何回も続くようになって、家族が心配する出来事が増えてきたのです。私のお兄ちゃんのこと

も、
「わごむくん、お元気かしら。」

とよく聞いてくるけれど、お兄ちゃんの名前はなごむです。それを、おばあちゃんに、何回も何回も伝えるけれど、おばあちゃんは、わごむくんと言っています。お兄ちゃんも私も、何とも言えない気持ちになつて

いる事は、間ちがいありません。このもやもやしている気持ちを、お父さんに話してみました。

お父さんにとっておばあちゃんは、お母さんのような存在だったそうです。毎日、仕事と家の事でいそがしくしているお母さんにかわつてよくそばにいてくれていた大切な人だと話してくれました。お父さんは、小学六年の時に受験をしました。始めて両親と離れて泊りに行った時もおばあちゃんが一緒にいてくれたそうです。一次試験の合格発表は、おばあちゃんが一人で行ってくれて、お父さんが一人でホテルのまど辺で待っていた時、おばあちゃんが走って帰ってきました。体中を使ってマルと伝えたのでした。その時のおばあちゃんのうれしそうな姿は、

今でも忘れられないとお父さんは言いました。それから二次試験もがんばる事が出来て合格したそうです。お父さんは、おばあちゃんに不思議な力をもらったと言っていました。

私の知っているおばあちゃんは、色々と忘れる事が多くて、がっかりする事もたくさんあります。だけどそんなおばあちゃんが大好きです。ペンだって、私と同じ気持ちだと思います。そんなおばあちゃんと話せる時間をこれからも大切にしたいと思っています。おばあちゃん、ありがとう。

対象図書名 おばあちゃんは大どろぼう？！

受賞者のひとこと

こんなに、すてきな賞をいただけたことをとても感しゃしています。ありがとうございます。

私は、本を読むことが大好きです。本へのこだわりは全くなくて、マンガ本やお料理の本や物語の本までどんな本でも大好きです。その本の中のむずかしい言葉は、お母さんに聞いたり、調べたりしています。私は、文章の中が楽しくなるような言葉を書くことが大好きです。これからも、みんなに楽しく読んでもらえるような文章を書きたいと思っています。

あれから、百四才のおばあちゃんは、ろう人しせつに入ってしまった。少し元気がなくなっただけれど、おばあちゃんの笑顔が大好きです。私のおばあちゃんへの思いは、これからもずっと変わりません。どうかおばあちゃん、長生きして下さい。こころより

小学生の部・最優秀賞(小五)

温かい社会になるために

松浦 七海

私は、太平のように、三本足のカメラやダウン症の女の子といった障がいのある動物や人が身近にいた経験はありません。けれども、大きな病気になるって、不自由な生活を送ったことのある人はいます。

四年前の出来事です。私がまだ一年生のとき、祖母がすい臓がんになっっていることがわかりました。そのとき、私はがんという病気についてよく知らなかったので、状況があまり理解できませんでした。今は、がんという病気は命がなくなる可能性のある病気だということは知っています。けれども、当時は祖母が手術を受けるために入院していたとき、家にいないことを、ぼっかり穴が開いたように感じるばかりでした。祖母はそれまで毎日私が学校に行くときに見送ってくれていました。入院

後、祖母の見送りがなくなることがさびしかった覚えがあります。毎週の習い事にも送ってくれていたのに、それができなくなったことも悲しく感じていた気がします。今考えれば、自分のことばかり考えて、祖母のことはあまり心配していなかったように思え、私は勝手だったなと感じます。

祖母の手術当日、私も病院に行きたかったのですが、何かの理由で行けずに、親せきの家にとまりました。私は手術の結果がとても心配でした。手術は八時間ほどかかったそうですが、無事成功しました。ただ、祖母はその後しばらく寝たきりになりました。食欲もでないようで、かわいそうでした。退院後も、がんが再発しないように、抗がん剤治療を毎週受けていたそうで、つらかったと思います。

そのころから、私は、祖母に無理をさせないように、自分の身の周りのことはできるだけ自分でしようと考え始めました。また、もっとたくさんお手伝いをしようと思うようにもなりました。

そして、祖母のがんのがきつかけで、私は病気や障がいのある人の立場になって接し方を考えられるようにもなりました。

太平は、三本足のカメラやダウン症の女の子と関わる中で、人として成長していきました。私は、祖母がすい臓がんになったことがきっかけで、優しい心を育てることができました。

病気や障がいのある人とできるだけ触れ合える環境の中で過ごしたほうが、人は思いやりの心が育つのではないのでしょうか。そして、そのよ

うな環境が増えるほど、温かい社会になっていくのではないかと思えます。

受賞者のひとこと

対象図書名 太平のカメ日記

最優秀賞に選ばれた時は、とてもびっくりして夜あまりねむれませんでした。家族やじゅくの先生、友達などにほめられたのでとてもうれしかったです。去年の作文コンクールでは、特選で選ばれてとてもうれしかったです。今は最優秀賞に選ばれももっともつとうれいです。作文でかいた、すい臓がんになったおばあちゃんに、そのことを伝えるとてもよろこんで、ほめてくれました。私は、一生わすれない思い出になり、いい、経験になったなど、思いました。

私は、作文をかくのが好きなので、もっともつと作文を書くのが楽しく、好きになりました。

これからも、作文を書く機会がよくあると思うので今の、経験を生かし作文を書いていこうと思いました。

小学生の部・最優秀賞(小六)

家族のかたち

岡部 愛子

「ま、いろいろあるってことさ」――颯太のこの言葉が私の心にしみだ。父親と母親がいて、そこに子どもがいる。これが普通の家庭。突然、親のどちらかがいなくなるなんて、考えもしない。でも、現実はいろいろある。真生のように両親の離婚によって、家族の暮らしが大きく変わってしまうことがある。私もそのひとりだ。

私が五歳の頃、それは突然やってきた。父と母は別々の道を行くことになった。幼い私にとって、大人の事情など理解できる訳がなく、母もまた私に理解させるだけの心の余裕がなかった。生活が一変した。その日から、私と弟にとっては「父親不在」の生活が始まった。私は母の前で父親のことを話さないようにした。母を悲しませたくなかったから。父がいなくてさびしいという気持ちよりも、元氣のない母を見ている方が辛かったのだ。

そんなある日、母のひと言で人生がより大きく変わる事になった。「そうだ！ 外国へ行こう。狭い日本でよくよしているより、誰も知らない外国で暮らそう！」この言葉は、前向きな母の性格を象徴しているよう

に思えた。何が何だか分からないまま、幼い私は、「外国」という言葉に心ひかれ、単純に喜んだ。旅行気分ではしゃいでいたのを覚えている。以前から母が行きたがっていたのは、イギリスだった。

母と私と弟の三人暮らしが、イギリスで始まった。幼い私にとっては、言葉も文化の壁もなかった。誰とでも打ちとけて遊べた。友達がたくさん出来た。母も楽しそうに笑っていた。笑顔の母がそばにいる。それだけで私は幸せだった。このまま、ずっとイギリスにいるのも悪くないと思いはじめていた。穏やかな生活がいつまでも続くものと思っていた。東日本大震災が起きるまでは……。

イギリスで知ったその悲劇に、私達は無関心ではいられなかった。被災地に祖父母を残してきたからだ。母は、自分の両親のことが気がかりで、居ても立ってもいられず、帰国するしかなかった。二年足らずの海外生活が終わり、また私の生活は一変した。帰国し、日本の小学校という新しい環境に慣れるのに今度はすんなりという訳にはいかなかった。イギリスでは全く気にせずに済んだ「父親不在」も、日本ではそうはいかなかった。人と違うということが変なプレッシャーになる。(そのことには触れないでよ) という気持ちになる。「みんな、いろいろあるってこと」――颯太のこの言葉を、心の中でくり返してみる。私だけでなく、みんないろんなものを抱えて生きているのかもしれない。家族のかたちもいろいろあっていいんだと思う。大切なのは、母も弟も私にとってかけがえのない家族だという気持ち。

前向きに頑張る母がそばにいるから、私も頑張れる。だから、母に「ありがとう！」だ。

中学生の部・大賞

明日に向かって

対象図書名 占い屋敷の夏休み

安藤 初

受賞者のひとこと

先生の電話に出た母は、「愛子、最優秀賞だって！」と、大きな声で叫びました。その声で、家中が大騒ぎになりました。私も、あまりの嬉しさに飛びはねていました。

私が今回選んだ本は、「家族」がテーマでした。今まで自分の心にしまっていた感情を思いきって書いてみることにしました。その当時のことをふり返り、素直な気持ちで自分に向き合うことができました。先生からアドバイスをいただき、何度も書き直しながら仕上げたので、達成感でいっぱいです。

入塾二年足らずの私が、このような名誉ある賞をいただくことが出来、うれしさいっぱいです。家族みんなも祝福してくれました。この受賞の喜びを忘れずに、これからも本をたくさん読んで、作文もがんばっていいこうと思います。

「夢をあきらめない」——簡単そうでとても難しい。まだ中学生なのに何を言っているんだと言われそうだが、私は今まで何度かあきらめかけたことがあった。結果を出せないと、どうしても弱気になる。そこから体を立て直すのに、かなりのエネルギーが必要になる。そのくり返しで、自信もなくしていたのだった。

そんな時に出会ったのが、今年五月にやって来た教育実習生だ。三人の内一人は、何と耳の不自由な女の先生だった。（大変そう・・・）と思っただけで、深く考えることはなかった。ところが、その先生が私達のクラスの担当になったのだ。そうになると、話は別だ。えーっ!! 何で私達のクラスなの？みんな同じ気持ちだったと思う。三週間程度とはいえ、気が重かった。私達のクラスは、成績が良いとは言えない上に、姿勢も決してほめられたものではない。耳の不自由な先生と上手くやっていく自信など誰もないはず。今の担任とも良好とは言えないのに。耳の不自由な人にどう接し、どうコミュニケーションをとればいいのだろうか。誰もが思っただけで。（面倒くさい・・・）。私の心配は他にもあった。何

と言っても私達は「受験生」だ。この大切な時期に、教育実習生に教えてもらうなんて。しかも、耳の不自由な先生に。勉強が遅れたらどうするの？ 普段でもちゃんと理解できないのに！ 私はひたすら自分の都合ばかり考えていた。

その先生の担当は国語だった。国語は説明が大変な教科なのに大丈夫？ と思った。先生の話し方は、正直聞き辛かった。何を言っているのかよく聞き取れない。（ま、別にいいや）と、私は神経を集中して聞くことをやめた。みんなも、つまらなそうだった。先生と私達の間には明らかに壁があった。給食の時間、先生は日替わりで各班ごとに関わり、一緒に食べる。生徒だけで盛り上がり、先生には誰も話しかけたりしない。先生は人の口の動きを見て言葉を判断するという「読唇術」を持っていた。だから、あまり早口で話すと理解できないことになる。私達の会話を理解しようと、一生懸命唇を見ているのが分かった。

私は先生の様子を観察している内に、先生にどうしても聞いてみたい疑問が生まれた。なぜ先生になろうとしているのかということだ。障害を持つていたら明らかに不利だ。学校の先生という仕事は、激務な上に生徒対応などで神経をすり減らすので、「うつ」や「ノイローゼ」になる人が多いと聞いたことがある。健常者でも大変なのに、なぜ「先生」という職業を選んだのか。実際、この瞬間も先生はこうして苦労しているではないか。私はこの疑問を、学校恒例の「日記」に書いて提出した。先生と生徒をつなぐ交換日記だ。今まで表面的なことしか書かなかった

私が、先生に本気で質問してみた。

心のこもった文章で返ってきた。先生が中学の時、自分の人生に希望が持てず、何をするにも無気力だったが、その時の担任の先生の情熱に救われ、自分が変わったという内容だった。自分が助けられたので、今度は自分が誰かを支えたいということだった。先生の強い意志を感じた。ちゃんと覚悟ができているんだ……。 （先生、強いなあ） 日記を読みながら、私は感動で胸が熱くなった。先生から勇気をもたらした瞬間でもあった。

その頃の私は、五歳から習っていたバレエで、伸び悩んでいた。以前は楽しくて、レッスンを待ち遠しかったのに、レベルが上がるにつれ、思うように表現できなくなっていた。年一回、大きな公演があるのだが私は今回、選ばれなかった。きつい練習にも耐え、体を鍛え、技や表現を磨いてきたこの十年。もはや、これまでか……。

バレエを始めるきっかけになったのが、初めて行ったディズニールンで、パレードを見たことだった。そこには輝くばかりの笑顔で踊るダンサー達がいた。そのダンスに魅せられ、自分もいつか大勢の人に夢を与えるダンサーになりたいと思ったのだった。

小さな挫折を何度か味わったぐらいで私は自分の夢に見切りをつけようとしていた。自分の中で勝手に「限界」を決めていた。先生に比べたら、私は恵まれすぎているのに。

今回、耳の不自由な先生以上に、障害を持った田島さんの存在を知っ

た。その強さに、やはり打たれる。優しさにも触れることができた。田島さんの生き方が、彼の詩によく表れている。

目標に向かって きょうも生きる

明日に向かって 強く生きる

明日に向かって 挑戦していく

田島さんの言葉を心に刻みつけようと思う。あきらめるなんて、もつたないから。

対象図書名 夢をあきらめない

大賞へ、審査員のこと

教育実習という学校にとってはストレンジャーな三週間を、耳の不自由な先生への戸惑いから、先生のことを考えるなかで自分のことも考えるようなことが起こった事がとても良かった。そして、自分の将来に先生を重ねて発展させていったところがすばらしかった。

とても冷静に自分が書くべきことを正確に表現できていて、全体の構成もとてもうまく書けています。

受賞者のひとこと

私にとってコンクールデビューといえるのは小学四年生だった。のびのびと楽しく書いた作文がいきなり「最優秀賞」に選ばれ、驚きと嬉しさでいっぱいになったことを、今でも覚えている。以来、今日まで毎年書き続けコンクールにも参加してきた。

「賞にこだわるな」という先生の言葉通り、毎年、思う存分書いて自分なりに作文を仕上げる楽しさを味わってきた。本の数だけ感動も味わってきた。さまざまな事を考えるようになり、自分の成長にもつながっている。

今回、タイトルを見た瞬間、「これだ!」と直感で選んだのが、「夢をあきらめない」という本だった。田島さんの生き方、考え方に大きな衝撃を受け、自分自身を見つめ直すことができた。コンクール参加が最後となる今回、「大賞」という名誉な賞をいただくことが出来、嬉しさも増だ。先生からの電話を受け取った母もあまりの嬉しさで涙ぐんでいた。六年間という長い年月、私を育てて下さった先生に、「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。

「一步の勇氣」

黒川 紗那

皆さんは「ほっとパーキング」をご存知だろうか。障害者手帳はないけど、難病や妊婦さん、怪我で一時的に歩行が困難な方等にプレートを渡し、公共機関やスーパーの入口に近い障害者用スペースに駐車可能な制度だ。私がこの制度を知ったのは、母からだ。私の母は難病だ。闘病生活はもう十年を超えた。体調はいい時も悪い時もある。定期的に通院し、薬は毎日大量に飲む。然うしないと普通の人と同じ様に生活が出来ないから、仕方がない。毎日無理をして仕事に行く。今年の春は特に病気が活性化し、足のあちこちの関節に炎症が起き、水が溜まり腫れた。負荷がかかる度に痛みが出るので、炎症が治まるまでは歩行がスムーズでなくなる。この春は「ほっとパーキング」のプレートをたまに使わせてもらっていた。そんな時、事件は起こった。

スーパーに買い物に行った時だ。入口の所で、おばさんが大きな声で話かけてきた。「あなた、ここがどういう人が駐車していいか分かっていないの？」と。私達は最初何を言われているのか理解できず、きょとんとしていた。続けて「ここは体の不自由な人が止めるのよ。あなたはどうか

見ても健康でしょ」と。ようやく理解した。おばさん、母のこと、健康な人だと思ってるんだ。無理もない。母は病気である事をなるべく表に出さない様に、湿布まみれの足がわからない様衣類で隠しているから。母は、「すみません、そう見えるかもしれないけど、病気があって今は思わしくなくて。」と言った。するとおばさんは、母の全身を上から下までしげしげと眺めて「どう見ても健康そうだけど。」と言い放った。「病気である事を証明しないとご理解いただけませんか？」と母が聞くと、「いや、いいけど、ふーん。」とおばさんは納得のいかない表情で去った。

私と母は泣いた。ただただ悔しかった。元気なのに障害者スペースに駐車する悪い人と思われた事、母が一生懸命私に心配かけまいと元気に見せている気持ちが踏みにじられた思いがした事、何より日々の生活に大変な思いをしているのにそれを軽く見られ、バカにされた気がした事、その全てが悔しかった。その日は買い物もせず、無言で帰った。母は夜に私に静かに話した。「今日は嫌な気分させてごめんね。障害者が皆車いすな訳じゃなくて、色んな病気で生活が不自由な人がいるでしょ。私のせいで普通では感じなくていい苦労や嫌な思いをしているけど、その分そういう人達の事を理解し、助けてあげられる大人になってね。」と。病気になって失った物はたくさんある、と同時に他では得られない物もたくさん得た、と思える様になったのは私も母自身も最近だろう。

もしかしておばさんは、勘違いによる正義感からの発言なのかもしれないとも思った。中には元気でも構わず障害者スペースに駐車する人も

いるからだ。現実には生活に不自由している人が、買い物をするだけで時間がかかり、どれだけ大変な思いをするか、考えたり感じたりする事があるだろうか。山の学習で体験した暗夜行路で、目隠しをして歩いたら三十分かけて五十メートルしか進んでいなくてびっくりした。それでも汗だけで、精神的な疲労と合わさってくださった。

そういう視点で日常生活を振り返ってみると、あちこちに「日常の困難」が潜んでいる事に気付く事が出来る。駅、スーパー、学校、あらゆる場所で私達は日々直面しているのだ。私は積極的な性格でないので、困っている人がいても、知らない人に声をかける勇気がまだない。見て見ぬふりをするのが現状だ。しかし私だけではない。大多数の人が気付かぬ振りをし、誰も助けようとしれない事が日常化しているのだ。「断られたいはずかしい、無視しているのは私だけじゃない、みんなそうだし」という言い訳を作って、自分を正当化しているのだ。母の苦勞を目にしている自分が、今出来る事を自ら放棄している事に気付いた。

「本当の失敗とは、やらないこと。」私は大きな失敗をしていた。家族の事だけ一生懸命で他の人の事はちっとも考えてなかった。これでは何もしていないのと同じ事。そんなことではこの世の中が、困っている人達も快適に暮らせる社会なんて来る訳がない。私も含め、一人一人が、まず「動き出す勇氣」を意識して持たないと、何も始まりもしないのだ。私達中学生は、これからの未来を背負っている。誰もが快適に暮らせる未来にするために、例えば私は一声かけることから始めたい。

「お手伝いできることはありませんか？」

この言葉一つでどれだけ心が豊かな未来になるだろう。想像してみると、心が晴れやかな気がした。今からなら出来る。一声かける一步の勇氣、私は持てた。

受賞者のひとこと

初めての最優秀賞だ！先生から話しを聞いた時は、ビックリして信じられなかった。今まで一度作家審査まで行ったが、ダメだったから今年も難しいだろうと思っていたからだ。これも全部、先生のおかげだ。私は本を読むのが好きで、好き過ぎて勉強そっちのけの時もある。母はやるべきこと（宿題や予習復習）をやりなさいと言うが、柚木先生は、

「すばらしいことです。是非伸ばしてあげてください。いつかそれが実る時が来ます。」

と言ってくれた。私はこれからも山のように本を読んで、本なら何でも知っている図書館司書になります。夢を叶える日まで、お父さん、おかあさん、先生、見守ってください。

対象図書名

夢をあきらめない

中学生の部・最優秀賞(中二)

乗り越えていく!

高橋 奏

「どうして、こんな体に生んでくれたんだよ!」田島さんのこの言葉に私はハツとした。私も同じような言葉で母を責めたことがあったからだ。

勉強が出来ない私。少しぐらいではなく、とても出来ない。手も不器用。運動神経も悪い。何をやってもダメだらけの自分が、私は嫌いだ。た。今まで、自分の存在意義を見出せずにいた。

同じことを聞いても、すぐ理解できる人もいれば、私のように何度説明されても分からない人がいる。それが能力の違いということなのかもしれないが、私には「生まれつき」のように思えてならない。何だか不公平だ。すぐに理解できる人は、それ程努力する必要もない。私の場合は、とにかく時間がかかる。理解するのに人の何倍も時間がかかる。だから、何をするにも引け目を感じてしまう。何をするにも積極的になれない。「自信」という言葉とは最も無縁なところで生きてきた。それが私だ。

こんな私に、母は一生けん命勉強を教えてください。あまりの覚えの悪

さに、母はいつもイライラする。語気が強くなり、ついには怒り出す。私の方も、教えてもらっていないながら、有難いと思うどころか、気分がどンドン落ち込んでいく。自分のふがいなさを突きつけられるからだ。今まで、何度もこのくり返しだった。小学生まではまだ良かった。成績表というものをそれ程深刻に受け止めていなかったから。でも、中学生になるとそうはいかない。定期テストがあり、点数や順位で自分の出来の悪さはつきりと突きつけられる。高校受験という現実も迫ってくる。母は私の進路を心配すればするほど、もつと頑張ってほしいと思うのだろう。それは、親として当然の感情だと私も分かっている。でも私の感情がついていかない。

ある日、いつものように母が勉強を教えてください、いつものように何度説明されても分からない私に、母が怒鳴った。いつもなら、ふくれっ面をして無言の抵抗をする私だが、この時ばかりはいつもとは違った。私のイライラが頂点に達し、ついに口走ってしまった。「なんで、私をこんなふうにしんだんだよ。こんな出来の悪い私なんか、生まなければよかったんだよ!」と。(言っちゃった・・・)母はどんなに驚いたことだろう。どんなに傷付いたことだろう。母が激怒したのは言うまでもない。でも私は謝らなかつた。

私の反抗はさらに続いた。夏休み、部活を終えて帰宅し、宿題をやるうとして机に向かったが、かんじんのその宿題の紙が見つからない。部屋中さがしても見つからない、母は、学校に忘れて来たんだろうから、

今から学校に行つて取つて来なさいと言う。私は部活で疲れていたの、また学校に行くのはどうしても嫌だった。「行つて来い!」「行かない!」のバトルが始まった。(こんなに疲れているのに、だれが行くもんか!)あまりに母がしつこく言うので、私は仕方なく家を出た。でも、学校に行く気は全くなかった。家にも帰りたくなかった。家の近くでふらふらしていた。何時間も……。 (母を困らせてやろう) その気持ちだけが頭の中でぐるぐるしていた。母が車で出かけるのが見えた。もしかしたら学校?私を捜しに行つたのだとすぐ分かった。戻つて来た母と兄の会話が聞こえる。「見つかった?」「まだ」——確実に私を捜していた。ようやく(どうしよう……。)という気持ちになつていた。今戻つたら、またどんなに怒られるだろう。二人が外にいる内に、私はこっそり家の中に入った。まるで泥棒みたいに。戻つて来た兄が私を見るなり、「おい!いつ戻つて来たんだ!お前が帰つて来ないから、お母さんは警察まで行つたんだぞ!」兄も怒つていた。(そうなんだ……。)そこへ母が戻つて来た。怒られる覚悟をした。私を見るなり母は泣き顔になつた。「良かったあ!無事で。どこに行つてたの?心配したよお!」

いつも私の心配ばかりしている母を、今度は悲しませてしまった。私は何てバカなんだろう。これが中学生のすることか……。こんな私だから、いつもでもダメなんだ。私は心から反省した。

田島さんが最後の方で、「お母ちゃん、ぼくを生んでくれてありがとう。

ぼくはたまたま不自由だけど幸せです」と言っている。

私は田島さんのように体が不自由でもない。それなのに、自分は何もできない人間だと思ひ込み、母に反抗ばかりしていた。

「できないのではない。やらないだけなんだよ。」田島さんからのメッセージを、私はしつかり受け取つた!

対象図書名 夢をあきらめない

受賞者のひとこと

夜、先生からの電話に出た母は、私が何かやらかしたのではと、身構えたようだった。先生が「奏さん、最優秀賞ですよ」と言つても、母は聞き間違いかと思つたらしい。それは、うなずけることだ。私は今まで「賞」とは無縁の存在だったからだ。セミナーでも、大勢の人が上位の賞を取る度、私は「みんなすごいなあ」と感心することしかできないのだ。

それでも、セミナーに入つて少しずつ変化してきた自分がいた。入塾前はマンガしか読まなかった私が、本が大好きになつたこと。読書の楽しみに目覚め、本からたくさんのお話を吸収するようになったこと。そして、いつの間にか作文を書くことも楽しいと思えるようになっていた。これだけでも、私にとっては嬉しい変化だと言える。

そんな私が「最優秀賞」をいただいたのだから、本当に夢のようだ。

今回、「夢をあきらめない」を選んで、心から良かったと思う。あきらめ

ないことの大切さを、今改めてかみしめている。

私をここまで導いて下さった先生、本当にありがとうございます

中学生の部・最優秀賞(中三)

苦しい時ほど

吉澤 龍人

「あきらめなきや、出来るんだよ。たいがいのことはさ。」——陽介の父親の言葉が、部活を引退した今の僕の心にしみていく。

僕は部活に全エネルギーを注いでいた。幼い頃からスポーツが好きだった自分は、中学生になって、一段とその面白さにはまり、勝敗にこだわるようになっていった。

テニス部に所属していた僕は、二年生になった時点で、ダブルスのペアとして年下の一年生と組むことになった。ただ者ではない。小学生の時「東北大会ベスト4」に輝いた期待の星だった。一方、中学で初めてテニスを始めた自分。その差は一目瞭然だった。周りからは「プレッシャーじゃない？」などと言われたが、僕はむしろラッキーだと思った。

こんな強い奴と組めば、上に行ける。自分さえ努力すれば、チャンスは

増えると思ったからだ。彼は実際強かった。年下のくせに少し生意気だとは思ったが、強さの方が際立っていたので、僕は技を盗んでいこうという気持ちになっていた。その前向きさが、上達にもつながっていた。試合でもそれなりの成績を修めることができて、僕は心の底からテニスを面白いと思うようになっていた。その頃の僕は、頭の中はテニスのこととでいっぱい、何よりもテニスを最優先する生活になっていた。「テニス大好き少年」とからかわれようが、全く気にならなかった。「飛ぶ鳥を落とす勢い」に近かった。このまま、順調に行けば、最後の中総体は「優勝」で飾れるかもしれない。そんな期待感で、僕はますますテニスに明け暮れる毎日を送っていたのだ。

ところが、そんな夢が打ち砕かれる事件が起きた。ある大事な試合で僕は負けてしまった。三回戦負けという悔しい結果だった。以前、練習試合で余裕で勝った相手だっただけに、よけいに悔しさが残った。あとで考えると、勝てる相手だという僕達の過信が、そういう結果につながったのだと思う。相手側にしたら、同じ失敗はするまいと、気合を入れ前回の反省をふまえてこの試合に臨んでいたに違いない。いい気になっていた僕は、鼻をへし折られたのだった。

挫折を味わった時こそ、その人の真価が問われるものだ。そのままダメになっていくのか。奮起して立ち上がるのか。情けないことに僕はいや、僕は「ちっぽけな人間」だった。その試合を機に、僕達の仲は険悪になった。お互いのミスを責め、一歩も譲らず、責任をなすりつけ合

ったのだ。お互いに腹を立て、とにかくお互いのミスが許せなかったのだ。周りはすぐに治まるだろうと思っていたようだが、修復するどころか、怒りは、一段とエスカレートしていった。

あろう事か、全く口をきかなくなったのだ。練習でも試合でも、声をかけ合うどころか、相手が少しでもミスをするたび、お互いに舌打ちをしたり、ものすごい形相でにらみつけたりしていた。あからさまに不快な顔をした。何度も顧問の先生に話し合うようにと注意されたが、お互いに聞く耳をもたなかった。僕は正直、こんな生意気で態度の悪い奴ともうやりたくないと思っていたのだ。

そんな気持ちで試合しても、結果はいいはずがなかった。その後もことごとく負けた。何もかもかみ合わなかった。それでも協力し合おうとは思わなかった。ダブルスとは言えなかった。まるで個人プレーに等しかったのだ。

相手が悪いと思いついでいる時は、自分の身勝手さに気がつかないものだ。上手くいっていた時は二人とも心からテニスを楽しんでいたのに。お互いを称え合っていたのに。ピンチの時もお互い声をかけ合い、励まし合ってきたのに。作戦を立てて勝利を手にしてきたのに。まさかこんな最悪の関係になるとは思ってもみなかった。

果たして意地の張り合いはどこまで続くのだろうか。何ヶ月も続く中で、僕は精神的にかなり追い込まれていった。どう考えても学年上の自分の方が不利だった。中総体出場はあと一回だけ。時間が無い。余裕の

ある彼が強気でいても何の不思議もない。僕は焦った。思い余って父に打ち明けた。父は全てを知っていて、僕がどうするのかを見ていたのだ。

「誰だっていい時もあれば勝てない時もある。いつまでもふてくされていて、それでお前は後悔しないのか！」——父の言う通りだった。器の小さいちっぽけな息子をどんなに情けなく思っていたことだろう。

年上なのに先輩らしい態度ができずにいた自分を心から反省し、長い「冷戦」にようやく終止符を打つことができたのだ。

人の心は「鏡」のようなものだ。怒りを見せると怒りが返ってくる。

その先には何も生まれない。「苦しい時ほど投げ出すな。」陽介の父親が息子に贈ったこの言葉を、僕も肝に銘じなければ……

受賞者のひとこと

その夜、僕は風邪気味で早めに寝ていた。先生からの電話だと母に起こされた僕は、正直電話に出るのが怖かった。先生に怒られるという思いしか頭になかったからだ。緊張しながら電話に出ると、「龍人、おめでとう！」という先生の明るい声が返ってきた。最優秀賞だと知らされ、風邪も一気に吹き飛ばすほど嬉しきでいっぱいになったのだ。

中三の僕にとって、今回は最後のコンクールだっただけに、悔いのない様全力で書いた作文だった。「投げ出さないことだよ。苦しいときほど

さ——表紙のこの言葉を目にした時、僕はテニスに明け暮れていた頃のある出来事が甦ってきて、自分の気持ちを整理するためにも、作文に書くように決心したのだった。こうして毎年作文を書く事が、自分自身について深く考えるいいきっかけになっていた様に思う。

入塾した頃、作文が苦手だった僕だが、すばらしい先輩達から学び、セミナーの刺激的な環境の中で、大きく成長できたと思う。

指導して下さいました先生に感激の気持ちでいっぱいだ。

第25回(平成27年度)全国読書作文コンクール

優 秀 作 品 集

平成27年10月 発行

発 行 公益社団法人 全国学習塾協会

〒117-0031 東京都豊島区目白3-5-11

TEL 03-5996-8511 FAX 03-5996-9585

E-mail info@jja.or.jp

